

# 『家庭の幸福』—その「義」の問題

李 智 賢\*

## 『Family Happiness』-Problem of “Righteousness”

LEE Ji-Hyun

### abstract

Literature of Dazai Osamu in the postwar period shows the world of works with theme of ‘family’ problems. Especially, it is considered that some works have a relationship before and after writing 『Family Happiness』. Dazai recognizes egoism that ‘family’ has and avoids family against egoism in his novel. Only with his view on family system as a product of modern history or the legacy of the old days, it is difficult to describe ‘righteousness’, a theme of Dazai.

To Dazai, the problem of family is connected to the problem of righteousness obtained from earnest experience. It is a problem of acting ‘right’ in front of God. To Dazai who is always conscious of God and fights with anxiety and fear, egoism that pursues comfort of his family ignoring others’ unhappiness is hard to be accepted for Dazai who has been struggling to love his neighbors. However, Dazai falls into self-denial due to sense of guilt and fear toward himself who wants to be righteousness but can’t.

To Dazai, the problem of ‘righteousness’ is so earnest that he says he wants to keep righteousness even ‘giving his life’ or ‘martyrizing his own son’. It is considered that Dazai’s grief and conflicts are very well expressed even though he makes a martyr of himself and his own family in some of his novels.

Keyword : Dazai Osamu, Family happiness, Righteousness, Christianity, Family egoism

### はじめに

太宰治が死去した二ヶ月後に発表された『家庭の幸福』（「中央公論」1948・8）は、その末尾に登場する警句「家庭の幸福は諸悪の本」<sup>1</sup>で有名であるが、さらに本作と関連して執筆された『父』（「人間」1947・4）、『おさん』（「改造」1947・10）、『桜桃』（「世界」1948・5）、『ヴィヨンの妻』（「展望」1947・3）等はいずれも「家庭」、「家族」を舞台にして、父として、夫としての立場から自己周辺の日常生活を素材にしたという点で非常に類似している。

ところで、小説に描写されている「家庭」には共通して、無能で、家庭に居たたまれず逃げだしている夫（父）の姿があり、その模範的で平和な家庭像とはかけ離れたその描写からは、一見太宰が「家庭」を忌避しているかのようにもみえる。だが一方で、太宰は『家庭の幸福』の中で、「私は政治運動には興味が無い。自分の性格がそれに向かないばかりか、それに依って救はれるとも思っていない。ただそれは、自分には、うとうしい許りだ。私の視線は、いつも人間の「家」のはうに向いてゐる。」と述べ、「家庭」への関心も暗示している。

このような問題は無頼派に分類される作風や、太宰の生活の不安定さの問題だけでは説明しきれないだろう。太宰の作品の中に現れるこのような「家庭からの脱走」現象と「家庭の幸福」を「悪」とみる点について、先行研究では、家族法の改革による「新家族」の「エゴイズム化」への警戒としてみたもの<sup>2</sup>と、旧道徳の実体である「家」制度の倫理と道徳を破壊しようとした試みとしてみたもの<sup>3</sup>、また表面的にだけ平和な家庭の欺瞞的な幸福への反感としてみたものがある<sup>4</sup>。さらには、他人には説明できない太宰の私的な「義」の問題としても論じられている<sup>5</sup>。太宰は「家庭」という問題を通して、現実と理想、生活と「義しい」もの<sup>ただ</sup>の間で常に苦悩する姿をみせている。それは、「命をかけて」でも守らなければならない「義」の問題でもある。

本稿では、この作品において前景化された「家庭」をめぐる問題を通して、太宰文学の要諦である「義」について明らかにしていきたいと思う。

---

キーワード：太宰治、家庭の幸福、義、キリスト教、家庭のエゴイズム

\*2008年入学 比較社会文化学専攻

まず、当時の社会的な状況や、近代社会が作り出した「家庭」というイデオロギーが太宰に如何なる影響を及ぼしたのかについて考察したい。特に、太宰が活動していた「日本浪漫派」による影響を考えたいが、その際に注目したいのは、保田與重郎が、太宰に先立って近代結婚と家庭制度を批判したという点である。この考察を通して、太宰の近代家庭の批判に保田の思想がどのように影響したのか確認できると思われる。

次に、その前後の作品から考察し、キリスト教の影響の側面から考察を進める。この「義」の問題は、太宰が「いのちをかけて」(『父』)でも守ろうとした切迫するものとして、死の直前まで格闘していた課題であることはすでに明らかであるが、社会現象的な原因と影響だけで解釈するには無理があるように思えるためである。このような考察によって、今まで不分明であった「義」の意味を理解し、太宰の「家庭」の問題を再解釈することができると思われる。

以下、「家庭」を素材とした数編の作品群を検討することによって、「家庭」に対して太宰が向けている視線、「家庭のエゴイズム」に関する意識、近代家族制度に対する批判などについて考察を進めたい。

## 1. 家庭のエゴイズムと「義」

戦後、太宰の文学で家庭問題をテーマにした作品世界が展開される中、太宰は『家庭の幸福』という作品を通して、「家庭のエゴイズム」の問題を警告した。この小説には、「私」が空想の中で作り出した、官僚と役人のエピソードが出てくる。役人の「津島修治」は自分の立場と自分の「家庭の幸福」だけを第一義にしたゆえに一人の女性を死に追いやってしまい、小説の最後に作者は「家庭の幸福は諸悪の本」だという警句で結論付けている。

このような「家庭のエゴイズム」の観念が根にあったためか、『家庭の幸福』が発表された一九四八年前後、太宰が何らかの形で家庭への思いについて書いた『父』、『桜桃』、『おさん』、『ヴィヨンの妻』等に登場する戦後の「新家族」の家庭は、いわゆる「幸福な家庭」として描かれているものは一作品もない。また、『家庭の幸福』の執筆と同時期に書かれたエッセイ『如是我聞』(「新潮」1948・3)からも、以下のように「家庭のエゴイズム」について露骨に非難している部分が見られる。

所謂、彼らの神は何だらう。私は、やつとこの頃それを知った。／家庭である。／家庭のエゴイズムである。／それが結局の祈りである。(略) ゲスな伝ひ方をするけれども、妻子が可愛いだけぢやねえか。(略) 所詮は、家庭生活の安楽だけが、最後の念願だからではあるまいか。(『如是我聞』)

ここで非難的になっている「老作家」は「志賀直哉」であって、実際、志賀直哉の『暗夜行路』(「改造」1921・1)に登場する家庭像は、明治中期以降に生まれた「幸福な家庭」像と、典型的に重なっていると言える<sup>6</sup>。太宰は、「志賀」たちが「文豪なんていわれて、娘や、家族にとりまかれてのうのうと家庭の幸福を満喫している」「そういう文豪意識がたまらない」と、「家庭の安楽」を神にしている彼らの意識を強く批判した。

ところで、このように太宰が「家庭」という問題を語る時に、「エゴイズム」の反対側に「義」という言葉が対置されていることが注目できる。『父』では、家長として家庭を顧みないことについて、「義のために遊んでいる」というイロニイ的な見解を展開してみせている。

「義のために遊んでいる。地獄の思いで遊んでいる。いのちをかけて遊んでいる。」(『父』)

つまり、「家庭のエゴイズム」を避けるため、遊ぶことにより「義」を成就するというイロニイであるが、この「義」とは具体的に何を意味するものであろうか。『父』において、「義」の問題は「解明はできない」もの、「その文字を具体的に説明して聞かせるのは、むずかしいのみならず、危険な」ものとし、自分でも明白に説明し難いものとして語っている。

さらに、『家庭の幸福』には、「義のために遊んでいる」という言葉に対応するように、「私」があげている二つの幸福な家庭とは対照的な、家長としての責任を忌避している「私」の家庭が描かれているが、その「義」の実体が表面には出ていない。

このように、作者が語る「義」が何物かについて読解は困難であり、たとえば奥野健男は「それが何人も納得しえない義というものであれば、太宰治だけが発見した私製の義の提唱になるかもしれない」と論じ、「その解明は不可能に近い」と、義の実体の究明の難しさを語った。

実際、太宰が「家庭の幸福は諸悪の本」という結論を得た理由について、これまで、様々な分析が進められてきた。野松循子は、戦後の家族法が改革され、「家」制度が廃止され、新家族の家庭がエゴイズム化されることに太宰が警告したのだと論じている<sup>7</sup>。また、三谷憲正は、「旧道徳の実体である「家」という制度と、そこから導きだされる倫理を破壊することが、彼の道徳革命のおおきな主題となったと考える」と論じている<sup>8</sup>。さらに、水洞幸夫は、お互い相手の人に心に向けていない、心の空洞をラジオ的な快活さで間断なく埋めようとする戦後の表面的な「家庭の幸福」を「諸悪の本」として否定すべきではないのか、と結論づけている<sup>9</sup>。このような論は、主に、社会的な制度や関係が太宰の思想に影響を及ぼしたとする視角として、「家庭」「家族制度」そのものに集中して語られている論である。さらに、「義」の問題を、社

会道徳、家庭制度の問題点に対応させているため、太宰が抱えている苦悩の問題と「義」を本質的に語っているのかについて、説明しきれない部分がある。

尤も、佐古純一郎が「義のモチーフがはっきり聖書からきている」と主張しているように<sup>10</sup>、作品をよくみると、太宰の「義」が神を意識したものだということが所々に表われている。それは、作品の中に「義」とともに登場する「恐怖」、「恐い」という言葉からも推測することができる。家庭の幸福を意味する「炉辺の幸福」は「こわくてならぬ」(『父』)ものとして表現されており、また男は「いつも恐怖と戦っているばかり」(『ヴィヨンの妻』)と語られているが、この「恐怖」は「世の中のどこかに神がいる」というように神の存在を意識したものだと言えよう。

また、「義」について『父』では「義のために、わが子を犠牲にするという事は、人類が始まって、すぐその直後に起こった」と作品の冒頭部分で語ったり、また「義のため子供を捨てる宗吾郎のつらさ」等を挙げ、太宰にとって「義」は、子供を犠牲にしてでも守りたいほどの絶対的な信念であったことがわかる。

奥野健男は「太宰の文学を如何に読解するかは、義の一語にある」と断言したが<sup>11</sup>、太宰文学を解明するためには、作品において前景化された「家庭」をめぐる問題を通して、太宰文学の「義」を明らかにすることが要諦になることがわかる。さらに、この「義」はキリスト教思想の影響の側面から考察されなければならない。従来、太宰の個人的な問題や家族制度の側面から論じられてきたものは、「義」をキリスト教の観点からみることによりもっと本質的に太宰の「家庭」問題に接近することができると思われる。

さらに、「義」の問題を明確にするため、キリスト教思想の影響の問題に接近する前に、太宰の戦前活動の、日本浪漫派などとの交流から、「家庭」と「近代結婚」の問題点を非難した保田與重郎の思想の影響や、近代家族制度のイデオロギーの影響についてまず考察してみたい。日本浪漫派の思想は太宰の「家庭」の思想にいかなる影響を及ぼし、また保田の近代結婚制度の批判と太宰の「家庭」のエゴイズムの批判はどのように異なっているのだろうか。

## 2. 近代日本の「幸福な家庭」のイデオロギーと日本浪漫派の影響

太宰は「家庭のエゴイズム」の問題と、「家庭」をめぐる「個人」の問題を、自分の中で解決しようとする危機感に迫られるかのように、同様のテーマを繰り返し書き続けて行った。同じ時期に書かれたこれらの短編は、用いられている言葉や素材が重複していたり、次の作に敷衍説明されていたりと、作品間に繋がりが見られる。

一方、太宰が近代人の「神」となった「家庭生活の安楽」(『如是我聞』)を警戒したのと同様に、保田與重郎は太宰に先立って、1930年代に近代の欺瞞的な結婚制度や家庭制度への批判を論じた『エルテルは何故死んだか』(『文学界』1938・3)を発表している。「日本浪漫派」は、1935年3月、保田與重郎、亀井勝一郎等を中心に創刊され、第二号から太宰治ら「青い花」の同人が合流し、太宰も「日本浪漫派」の一員として活動した。

『エルテルは何故死んだか』は、ゲーテの「若きエルテルの悩み」をテキストにし、ウェルテルの立場を通して、近代の矛盾とイロニー的な性格を説明した論である。保田の考察によると、近代の家庭は一夫一妻制の「結婚制度」の上に築かれており、家庭は新ヨーロッパ社会の体系を維持する最小限の単位として、その機能を要求された。国家は国家体制のために耐えうる範囲の犠牲として、愛情と制度との妥協を与え、「そこに近代式結婚は恋愛と制度を妥協させた中間的存在としてあらわれた」のである<sup>12</sup>。保田はこのように、近代の欺瞞的な結婚制度や家庭制度を批判し、「体系の維持を愛情に要求する政治は失敗する筈である」と主張した。

そもそも、1934年11月に「コギト」に掲載された『日本浪漫派』広告によれば、「日本浪漫派」の精神とは、「昨日の習俗を案ぜず、明日の真諦をめざして滞らぬ」ものであり、「芸術人の天賦を真に意識し、現状反抗を強ひられし者の集いである」という。

日本浪漫派の反俗、反近代、反合理主義の方法は、太宰にも見られるもので、彼が活動していた「青い花」も同じく、浪漫的イロニーをその基底思想としていた。死を恐れず、生存のための妥協や打算にとらわれない「純粹」を追求する精神を基底に持っていた。鳥居邦朗は「その時代」<sup>13</sup>で、太宰の場合は、彼の散文家としての資質から言っても、あくまでも俗な現世を描きながら、その中で人間の心情をつきつめることによって、俗を超えた、近代、合理主義を超えたものをとらえようとしたと指摘した。

ところで、保田が近代家族制度の欺瞞を批判し、その不合理性を打ち明けた一方、太宰も戦後に入って「家庭」の問題を主題にする作品を書き始めた。

明治維新以降、急激な近代化を駆け抜けた日本では、近代国民国家を形成するため、「幸福な家庭」のイデオロギーを作り出した。この「家庭」に付与される形容詞は、「幸福」、「快樂」、「健全」などであり、その「家庭の幸福」を象徴するのが「一家団樂」であったが<sup>14</sup>、太宰は、近代国民国家の建設と国民の養成のために発明された「家庭」のモデルに順応することに、強い反感を持ったように見える。それは、太宰の小説の題名が『家庭の幸福』になっている点や、「清く明るくほがらかに」が冒頭に書き出されている点からも、彼が国家により作り出された家庭イデオロギーを皮肉に表現しているということが推察できよう。

冒頭に提示された「清く明るくほがらかに」は、当時の政治状況に照らしみることができるが、1940年に成立した近衛

文藝内閣は、戦争の泥沼化に対する打開策の一つとして大政翼賛会を結成し、「大政翼賛会」による美人の標語の一つが「清く明るく朗らかに」であった。このように「清く明るくほがらかに」は、軍国主義的官僚思想の一つだったといわれるが<sup>15</sup>、太宰はこれを「官僚」という言葉とともに、「いかにも間が抜けて陳腐で、馬鹿らしくさへ感ぜられ」と表現した。小説の中に挙げられている二つの家庭を見てみよう。

そうして街頭録音の放送の三十分くらい前から家族全部、緊張して受信機の傍にあつまる。

「いまに、この箱から、お父さんの声が聞こえて来ますよ」(略)

中学一年の男の子は正座して、そうしてきちんと両手を膝に置き、実に行儀よく放送の開始を待っている。この子は、容貌も端麗で、しかも学校がよくできる。そしてお父さんをこころから尊敬している。(『家庭の幸福』)

「教育勅語」の公認イデオロギーが儒教であったように、「街頭録音」の中の官僚の家庭は、子供たちは父を尊敬してラジオの放送を聞くときも正座をして聞く準備をする。この官僚の家庭が権威的な明治近代風の家庭のモデルだったとすれば、作品中小説の津島修治の家庭の設定は、きわめて戦後型の家庭モデルのイメージに沿っている。

細君にとっては模範的な亭主であり、老母にとっては模範的な親孝行息子であり、さらに、子供たちにとっても、模範的なパパである。彼は酒も煙草もやらない。我慢しているのではなく、ほしくないのだ。(略) 家庭は常に春の如く、かなり広い庭は、ことごとくうちたがやされて畑になっているが、(略) 四季の草花や樹の花を品よく咲かせ、庭の隅の鶏舎の白色のレグホンが、卵を産む度に家中に歓声が上がり、かきたてたらきりのないほど、つまり、幸福な家庭なんだ。(『家庭の幸福』)

ここでは、まず「お父さん」ではなく、酒も煙草もやらない、家庭で草花を栽培しているのが趣味である極めて家庭的な「パパ」が登場し、アメリカナイズされた戦後型の家庭の表象が用いられている。太宰は「幸福な家庭」のモデルであるこの二つの家庭を提示しつつ、無能な家長の「私」の家庭を浮き彫りにしている。

酒と煙草とおいしい副食物以外には、極端に儉約吝嗇の私にとって、受信機購入など、とんでも無い大乱費だったのである。それなのに、昨年の秋、私がいかに依ってよそで二、三夜飲みつけ、夕方家は無事かと胸がドキドキして歩けないうくらい不安と恐怖とたたかいながら、やっと家の玄関前にたどりつき、(略)

「まあ、お父さん、いったいどこへ行っていたんです。」(略)「あちこち、あちこち」  
箆筒の上からラジオの声。

「買ったのかい？これを」

私には外泊の弱味がある。怒ることができなかった。(『家庭の幸福』)

たとえ「私」が家の安否を気づかって、また不安と恐怖と戦っていたとはしても、いつものようによそで二、三夜外泊してきた「お父さん」は、家庭のことについて干渉も、怒ることもできない。家族もよそで外泊してきた父をみてそれほど案じる気味ではない。「私」は父として、夫として家族からしても傍観者、客のような存在となっているのである。

ところで、保田の「近代家庭批判論」が「愛情と制度の妥協を与え」、「体系の維持を愛情に要求した」欺瞞的な結婚を批判したものとすれば、太宰は制度化され作られた「幸福な家庭」のイデオロギーの受容に反感をもったといえる。松本鶴雄は、近代が内包している危機の予感を保田と太宰は半世紀以前に直覚したと主張しているが<sup>16</sup>、この太宰が「日本浪漫派」から摂取したのは、「近代家庭制度批判」という視点そのものというより、日本浪漫派の本来の精神である反俗・反近代の精神、制度に妥協を許さない純粋な精神の方であるのだと、言えるのかもしれない。

なぜならば、太宰は近代の制度化された家庭の姿を皮肉に語り、俗の世界に合流しまいとしながらも、その真の悩みは単に近代家族制度の批判にとどまる問題とはいえないためである。彼がもっとも警戒したのは「家庭のエゴイズム」であって、「私」は常にそのために「不安と恐怖」と戦っているが、作品の中に描かれている「私」は「近代の危機」の問題より、もっと個人的で内密な問題を抱えているようにみえる。よって、次節では各作品の中で取り扱っている「義」を中心に、彼が悩まされている「家庭のエゴイズム」の問題を検討してみることにする。

### 3. 太宰の追求した「義」と「反キリスト教的なものへの戦い」

家長として無能である「私」は一見、家庭を嫌悪し、離れようとしているかのようであるが、実際はそうでもなく、「罪意識」とともに家族と向き合っている。作品の中からも、<sup>17</sup>「不安と恐怖」の裏面に、太宰は幸福な家庭というイメージを非常に深く抱いていることがわかる。

「家庭の幸福、家庭の平和、それは人生の最高の栄冠である。皮肉でも何でもなく、まさしく麗しい風景である」

「家庭の幸福。誰がそれを望まぬ人があろうか。私は、ふざけて言っているのではない。家庭の幸福は、或いは人生の最高の目標であり、栄冠であろう。最後の勝利かも知れない。」  
（『家庭の幸福』）

このように家庭が大事だという実感と、「家庭の幸福は諸悪の本」、「子供より親が大事」という観念の矛盾の間で、太宰は必死に解決口を見つけようとしていたように思われる。太宰自身にも、家庭の平和と家庭の幸福を熱望する一方で、自分がそのように妻と夫と子供による一つの理想的な家庭を形成することについても恐怖と違和感を持つという混乱があったように見える。

『父』では、「炉辺の幸福」、つまり家庭の幸福を拒否することが「義」を守ることだというイロニーを主張しているが、「炉辺がこわくてならぬ」というのが、自分が幸福な家庭を持つことへの違和感と、罪悪感の表出だとすれば、これは「家庭の幸福は諸悪の本」という作者の観念とも通じているのである。

ところで、「家庭」を背景にした作品で目を引くのは、これらの作品が聖書の引用から始まっているということである。『人間失格』（『展望』1948・6）において「罪」の対義語を探す「アント遊び」が太宰の生の重みの主題を露にしたように、『人間失格』に先駆けて書かれたこれらの作品の冒頭に書かれている聖句も、軽んじることはできない。

『桜桃』は、「われ、山にむかひて、目を挙ぐ」（詩篇 121：1）という旧約聖書の詩篇の一節を引用しつつ始まっている。この小説にも、家事に無能で、馬鹿げた冗談ばかり言っている父が登場する。仕事部屋に弁当を持って出かけて、それっきり一週間も帰宅しない事もある。子供が三人いるが、長男は四歳になっても立てない、言葉は一言も話せず、たくさん食べるが少しも成長しない、という家庭である。そのような状況にありながら皮肉にも「子供より親が大事」という言葉を投げつけている。

「私はね」／と母は少しまじめな顔になり、  
「この、お乳とお乳のあひだに…涙の谷、…」／涙の谷。  
父は黙して、食事をつづける。（『桜桃』）

「涙の谷」という言葉が導火線となって夫婦の気持ちは危機を迎えることになるが、この言葉一つで家庭を顧みない夫をもった妻の、悲しみと苦しみがありありと伝えられてくる。夫は沈黙し、「おれだってお前に負けず、子供の事は考えている。自分の家庭は大事だと思っている、（略）でもおれには、どうしてもそれまで手が回らないのだ」と一人で思うが、その後の行動は机の引き出しを掻きまわし、小為替を持って家をでるというさらなる逸脱行為である。ここでは、直接的な表現として「義」のため、というのが表に表れてはいないが、自分も「子供のため」「家庭のため」というのを第一の「義」にするべきだということを確認しようとしている。

しかし、父は子供と家庭を犠牲にしても「義」を守り、真実を証明しなければならない。これは、イサクを捧げたアブラハムのように絶体絶命の選択であり、そのため「男のやりきれない弱点」にも近い。その反面、父は「大皿に盛られたきた桜桃を極めてまずそうに食べては種を吐き」「心の中の虚勢みたいに呟く言葉は、子供よりも親が大事」のように虚勢をはる。いつも冗談ばかり言っている父らしい虚勢であるが、しかしこれは冒頭に提起された「われ、山にむかひて、目を挙ぐ」という一節と合わせられ、極みに達した父の悲嘆を感じさせている。

永藤武は「われ、山にむかひて、目を挙ぐ」を太宰が読点を二箇所加えることにより、精神的な喘ぎにも似た緊張感が表出されてくると指摘したが<sup>18</sup>、胸に涙を潜めた妻をみる夫の悲しみと、「義」のために家庭と子供を犠牲にしても自分を欺瞞することのできないものの、喘ぐような「神」に対する祈りが引用聖句によく表れていて、これは「子供より親が大事」だという虚勢とあいまって、もっとも切迫したものとなるのである。さて、「われ、山にむかひて、目を挙ぐ」の一節は、旧約聖書の詩篇一二一篇の聖句で、次のように続いている。

「わが助けはいつこよりきたるや／わがたすけは天地をつくりたまへるエホバよりきたる」  
（詩篇 121：2）<sup>19</sup>

この一節は『正義と微笑』（錦城出版社、1942・6）にも同じく使われていて、太宰が好んで愛唱する聖句の一つであるが、聖書の中で「山」は避難所であり、神の声を聞く場所でもある。詩人は苦難の中で天地を創造した神を仰ぎみ、引き下がることのできない所から神を求めてきた。そこは、自分の助けが天の神からくるという悟りと信仰の告白があるところである。

「私」を圧迫していた「義」への願いと、妻の涙の谷を目にする現実の間で、「義」であることを願いながらもそうすることができない「私」は、山にむかひて、目を挙げるが、その後続く「わが助けは天地をつくりたまへるエホバよりきたる」という告白を口にするには、彼にのしかかっている現実の重圧はあまりにも過酷である。

さて、『父』という短編は冒頭から「義」という言葉をむき出しにしているが、ここでは旧約聖書の創世記の聖句が挙げられている。信仰の祖といわれているアブラハムが「信仰の義者たることを躊躇せず、愛する一人息子を殺そうとした」

という。アブラハムの妻サラは、神の約束を信じて待ち望んで、アブラハムが百歳になって男の子イサクを生んだ。そのよるこびはたぐうものなく、神の約束により得られた一人子に対する愛は限りなかった。しかし神は「爾の子爾の愛する獨子即ちイサクを携てモリアの地に到りわが爾に示さんとする彼所の山に於て彼を燔祭として獻ぐべし」（創世記 22：2）と命じた。

「イサク、父アブラハムに語りて、／父よ。と曰ふ。／彼、答へて、／子よ、われ此にあり。／といひければ」（創世記 22：7）

最初に「義のために、わが子を犠牲にするという事は、人類が始まってすぐその直後に起こった」と始まっているが、アブラハムは信仰を守るため一人息子を犠牲にしようとした。「義」のために自分の手にかけて一人息子を殺そうとする信仰である。本文に挙げられているこの箇所は、ちょうどアブラハムがイサクを捧げ者にするため、刃物をもって祭壇に行く途中に、自分が捧げ者になることを何も知らないイサクが父に向かって聞いているところである。最も愛する息子を犠牲にする父は父性愛で心が裂かれ、涙ぐんでいただろうが、太宰は父としての心情、また神の前での自分の心情をこの箇所を挙げることにより例えていたのだろう。

『桜桃』に引用された「われ、山にむかひて、目を挙ぐ」が、絶望の果てに神に向かって嘆息するという緊迫な状況だったとするなら、この引用に出てくる一人子を捧げるアブラハムの立場は、より絶体絶命の従順を示さねばならないという状況だといえよう。

太宰は『父』において、「義」というのが、「説明して聞かせるのは、難しいのみならず、危険な」ことであると語っているが、繰り返し同じモチーフを持って書かれた『ヴィヨンの妻』、『人間失格』等前後の作品からみると、作者は常に「神を怯え」、<sup>20</sup>義しいものであることをめぐって格闘していた。つまり、彼がいう「義」とは「神の前で義者たることを守る」であることがわかる。さらに、その中の一つは他人を不幸にすることのできない「隣人愛」であった。

『家庭の幸福』の「津島修治」は自分の家庭の幸福にとらわれ、家庭を第一にしたゆえに、知らずして一人の女を犠牲にし、死に追いやってしまう結果になった。勿論、家庭の幸福を第一にすることと女の死の間に必然的な因果関係があるとは言い難い。語り手自身、官僚の家庭のことはあくまでも「寝ながらの空想」であるとわきまえている<sup>21</sup>。自分と自分の家庭の幸福を第一義にして、他人の不幸を顧みず、自分の安楽だけを神にし、求めているということは、「神の前で義者たることを守ろう」とする「私」には容認することはできない。

太宰が「家庭のエゴイズム」の問題を『如是我聞』で挙げ、「文豪なんていわれて、娘や、家族にとりまかれてのうのうと家庭の幸福を満喫している」という志賀直哉を批判したのを確認したが<sup>22</sup>「隣人愛」を実践しようと格闘していた太宰の内的葛藤も『如是我聞』から確認できる。「私の苦悩の殆ど全部は、あのイエスという人の、「己を愛するがごとく、汝の隣人を愛せ」という難題一つにかかっているといってもいいのである。」（『如是我聞』）とあるように、太宰が「反キリスト教的なものとの戦い」<sup>23</sup>を続けてきたことを察することができる。

義とは？

その解明はできないけれども、しかし、アブラハムは、ひとりごを殺さんとし、宗五郎は子わかれの場を演じ、私は意地になって地獄にはまり込まなければならぬ、その義とは、義とは、ああやりきれない男性の、哀しい弱点に似ている。（『父』）

アブラハムは「義」のためひとり子を殺そうとまでしたが、それは「やりきれない男性の、哀しい弱点に似ている」ため、「私」は意地になって地獄にはまり込むしかない。自分の命より尊い子供を犠牲にしても、<sup>24</sup>義しいものが何かを証明しなければならぬ。結局作家は神の前で義しいことを守ることと、自分の家族を犠牲にしていることとの罪悪感と、自己矛盾の間で、「意地になって地獄にはまり込む」自己放棄を選択するようになる。「子供より弱い親」が、「義」を守るということは、「やりきれない男性の弱点」に似た、かなしい親の弱点になることなのである。

太宰の文学が罪の意識から離れることができないものとしたら、それを裏返すと、彼の文学は常に「義」を意識し「義」でありたいと熱望していた「義の文学」だということを意味する。

永藤武は、『桜桃』は『人間失格』に先行して書かれた作品で、『人間失格』にいたる太宰のキリストの受け止め方をわかるため見逃せない作品であると指摘しているが<sup>24</sup>、「家庭のエゴイズム」の問題は、神の前で義しいものを求めた太宰の信仰的課題の問題だったとみることができよう。

前節でみた太宰が日本浪漫派の精神から得た反近代、反俗の精神、不屈の純粹の精神は、近代家庭という俗のイデオロギーに屈服しないという点や、自分の信念と現実の間で妥協しないという面に影響が見られると言えよう。

しかしながら、その中でも太宰が真剣に抱えていた苦悩は、神の前での「義」の問題であった。「家庭」というテーマを通して、太宰が最後まで守り抜こうとした「義」の問題の格闘の過程をみてみたが、太宰が内面的に戦っていた「不安と恐怖」というのは、信仰的な側面から接近してこそ理解できる問題であったといえるだろう。

## 結 論

以上、太宰の戦後の「家庭小説」群について考察を加えてきた。彼が「家」、「家庭」というものの持っているエゴイズムを認識し、それに反逆し自分の家庭を忌避する形として表しているのは、単純に家庭制度自体を、破壊すべき旧道徳の遺物とか、近代の産物とみるゆえとするだけでは、太宰が持っている「義」の問題を十分に読み解くことはできない。彼が属していた日本浪漫派の「近代家庭制度批判」も、近代の危機を予知した保田により主張され、太宰にも制度化され作られた家庭像を警戒するという形で影響を与えたとみえるが、太宰が「日本浪漫派」から摂取したのは、「近代家庭制度批判」という視点というより、日本浪漫派の本来の精神である反俗・反近代の精神、制度に妥協をゆるさない純粹の精神の方であったと思われる。

太宰において「家庭」という問題は、切実な体験から得られた、神の前で義しいものとしてあるため格闘した「義」の問題であった。

「おそろしいのはね、この世の中の、どこかに神がいる、ということなんです」(『ヴィヨンの妻』) といって神の存在を否定しなかった太宰文学において、彼が常に感じた「不安と恐怖」<sup>25</sup>は、「神」と「罪」の問題から離れては説明しにくい。他人の不幸を顧みず、自分の家族の安楽と幸福だけを考えるエゴイズムは、「隣人愛」を実践するため戦っていた太宰には容認できないものであった。

ところが、太宰は義でありたいと願いながら、現実には義でありえない自分の罪悪感と恐怖と戦って、結局はきわめてネガティブに自己否定に陥ってしまうようになる。『桜桃』の中で「相手の確信の強さ、自己肯定のすさまじさに圧倒せられる」と書いたのと、志賀直哉に対して「自己肯定のすさまじさ」(『如是我聞』)を非難したところは、「義」というものを知っているながら、決して自己欺瞞することができなかった太宰の心情を表現したものであった。

太宰において「義」の問題は、「義」のためなら「いのちをかけて」でも、「息子を殺して」でも守りたいという切実なもので、ここで検討した数編の小説には、その中でも自分の家族を犠牲にしているものの悲嘆と葛藤が、よく滲み出ていると思われる。

以上見てきたように、太宰文学の要諦を解明するにあたっては、キリスト教思想の影響をあらためて前景化することが必須である。

今後は、太宰の初期からの作品も考察し、キリスト教の思想の摂取過程を通して彼が「家庭」をみる視線がどう変わっていったのかについて検討し、彼が「家庭」という問題を通して考えた自己の問題をさらに明らかにしたい。

## 註

- 1 太宰治『家庭の幸福』(『太宰治全集』筑摩書房、1975、以下引用は全てこれに拠る)
- 2 野松循子「太宰治文学〈家庭〉の幸福について」『萩女子短期大学研究紀要』(1993、1)
- 3 三谷憲正『太宰文学の研究』(東京堂出版、1998)
- 4 水洞幸夫「太宰治『家庭の幸福』論—ラジオ的な〈幸福〉を超えて」『太宰治研究第16輯』(和泉書院、2008、6)
- 5 奥野健男「その文学」『太宰治研究』(筑摩書房、1978、6)
- 6 江種満子(「暗夜行路の深層」『女がみる日本近代文学：フェミニズム批評の試み』(新曜社 1992、3))は、志賀直哉は作家としての「家」意識が支配している生活環境で育ち、新しい世代の日本人として、明治国家が教化に努めた時代的要請を素直に受け入れたゆえに、このような家庭の幸福像が描かれたと指摘している。
- 7 注2に同じ
- 8 注3に同じ
- 9 注4に同じ
- 10 佐古純一郎『太宰治論究』(朝文社、1992、6)
- 11 注5に同じ
- 12 保田與重郎「ウェルテルは何故死んだか」(『保田與重郎全集3』講談社、1986)
- 13 鳥居邦朗「その時代」『太宰治論』(雁書館、1982)
- 14 上野千鶴子『近代家族の成立と終焉』(岩波書店、1994)
- 15 青木京子「太宰治『家庭の幸福』試論—志賀直哉「邦子」への反逆」(『太宰治スタディーズ』、2008、6)
- 16 松本鶴雄「ウェルテル問題と『家庭の幸福』について」(『群馬県立女子大学国文学研究』2009.3)
- 17 内田道雄「太宰治のドストエフスキー」(『解釈と鑑賞』1977、12)
- 18 永藤武「太宰治におけるキリスト教摂取の結末—『桜桃』の作品分析を通して—」(『国学院大学日本文化研究』、1981、3)
- 19 太宰が挙げている「われ山にむかひて目を挙ぐ」の聖句は文語訳(明治訳)旧約聖書(初版1887年)版と一致している。ここに引用する聖句も文語訳(明治訳)旧約聖書(1953年)版に依る。(引用出処 <http://bible.salterrae.net/>)
- 20 「やあまた僕の悪口を書いている。(略) 神におびえるエピキュリアンとでも言ったらいいのに。」『ヴィヨンの妻』(『太宰治全集』筑摩書房 1967年)

- 21 水洞幸夫「太宰治『家庭の幸福』論—ラジオ的な〈幸福〉を超えて」
- 22 習作期から志賀に憧れていた太宰は、志賀の作品を模倣するなど敬意を持っていた。志賀の初期の作品をみると、キリスト教思想の影響による「罪意識」を取り扱った作品を書くなど、太宰が熱中していた「義」の問題への共感があったように見え、太宰は志賀を特に非難的に行っていたようにみられる。
- 23 志村有弘編『太宰治大事典』（勉誠出版、2005. 1）「如是我聞」560頁
- 24 注18に同じ
- 25 「男には、不幸だけがあるんです。いつも恐怖と、戦ってばかりいるのです。」（『ヴィヨンの妻』）  
「不安と恐怖とたたかいながら、やっと家の玄関前までたどりつき、大きいため息を一つ吐いてから、がらりと玄関の戸をあけて」（『家庭の幸福』）